

「ホイ、出してやれや」

こうして三キロほどの米をせしめると、来たときと同じように、ふらりと風に吹かれるように帰って行くので

す。

「アブジはどうして……」

と、或る日私は聞きました。

「米を借りるんだ。同じことなら金を借りた方がいいだろう。いろいろ買いたい物もあるだろうし」

すると、アブジは、そんな質問をあわれむように答えたのです。

「お前はアホか？ 金を借りたら勘定から引かれるやろ。コメなら返せとは言にくいやないか。コメは借りても返さんでええんや」

何だか奇妙な理屈ですが、アブジが大得意で意気揚々としていましたので、成程と思ってしまうのです。

その武田アブジが、松本親方の弟の繁雄の車に同乗して、多田まで来たのは何の用なのでしょう。

同じ幾世平山姐御も持ったようです。

「アゼは今日は何や」

「何もなし。多田がどんな所か思ってたやな」
いぶかる姐御の方が拍子抜けするような答が返ってきました。

武田アブジには「何か用か」とたずねた姐御が、繁雄には同じ質問をしなかったのは、この弟の来訪が、前から予定されていたからなのでしょう。

「じゃア行こか」

いつの間にか外出着に着替えていた姐御は、弟をうながして、その車に近づきます。

どうやら、西宮か尼崎に用事があったて出かけるのを、弟がむかえに来たということなのだと察しがつきました。

歩きながら姐御は、私とアブジに忙しく声をかけます。

「善やん、そんな方頼むで。そや、途中まで一語に乗って行くか。武田アゼはどないすんねん。多田で遊んで行くならゆっくりしていけや。しゃアけど相場には誰も居いへんよって……ああソーリが居ったなア」

「いや、俺も帰る。誰も居れへんのやつたらつまらん」

武田アブジは、そう言って、さっさと車の助手席にのりこみました。

「日野さんは何処へ行くん？」

と繁雄が聞きます。

「神戸……」

と私が答えるのを引きとって、姐御が早口で説明します。

「うちが用事を頼んだんや。外人登録の切り替えに行っ

てもらお思って」

「ミッ姉さん、そらあかんで」

「何でや」

「あれは本人が行かな受けつけてくれへんのや。いくら善ちゃんでもそらあかん。」

「かめへんやろ」

「何いうてんねん。本人の指紋を押さんならんねんでえ」

「あ、そか、そやったな」

姐御はそこで私をふり返ります。

「本人がいかんあかんねんで、せやから善やん、もうえええわ。すまんかったな」

「いや」

預かった登録証を返すと、姉弟と武田アブジを乗せた車は、軽やかなエンジン音を残して走り去りました。

いやいや引き受けた用事ですが、こうもあっさり中止になると、何だか気が抜けたような、アホらしいような気持ちになって、私はその車が見えなくなつたあとも、ボンヤリそこに立っていました。

アホらしさにボンヤリしてしまつたその心の隅に、何かひっかかるものがあります。

それが何なのか、まだはつきり形にならないで、たとえば背中がかゆいのに手がとどかないときに似た淡い苟

立ちを感じます。

不意に池田ソーリが私の背中に話しかけます。

「ああ、紫ちゃん達帰ったん？ 待ってくれたら乗せてもらおう思つたのに」

ソーリの声は、のんびりと向延びがしていて、取り残された悔めしさは感じられませんが、私の背立ちとも、もどかしさともつかぬ感情をかえって刺激します。

「どがいするんぜ、日野さん。神戸には行かんのかいな」
「ああ、中止になった」

不機嫌に答えたものの、自分の声が思いがけぬぶつきらばうにとがっているに、今度は私自身があわてました。一気を取り直し、つとめて明るい声になって言いました。
「神戸行きは中止になったけど、何処ぞへ遊びに行こうか、カメラ持って。なア、ソーリ」

注(一) アブジ(朝鮮語) アボジの訛り。親父さんとか、伯父さんという意味。

註(二) アゼ(朝鮮語) 正しくはアジヨシ。日本語の伯父、叔父に当る言葉。転じてそれと同年代の男性。

四角い棒の中で、風景がゆつくり後方へ流れていきます。電車が駅を離れ、軽いショックを感じたとき、まるで、そのショックにふり落されたように、私の心の中の黒い幕がすっと消えました。

(そうだと、指紋だ)

私は胸の中でつぶやき、その言葉を心の中で手さぐりする思いで目を閉じました。

さっきから心の隅に何やらひっかかっている、少しも形にならなかったその何かが、突然、言葉になって渦を巻きました。

(そうだと、指紋だ)

もう一度確かめるように胸の中の言葉をくり返して、その言葉が私にもたらしめてくる思いをたぐり寄せました。さっき、平山姐と繁雄の会話の中で、その言葉が出たとき、何気なく聞き流したのですが、あの時、私の心の隅に引っかかったのがこれだったのです。たしか繁雄は、

「何いうてんねん。本人の指紋を押さんならんねんでえ」と言っただけです。

某年某月、或る男が或る役所から呼び出しの通知を受けました。

どういふ事情わかりませんが、男はその役所から若干の金を支給されることになり、但し何月何日まで印鑑持参で出頭せられたし、とハガキに書いてありました。

その何月何日、ということは指定された日の最後の日に男は役所に行きました。

いろいろ理由はありましたが、男にとって役所に行けるのは、その日しかなかった都合がつかなかったのです。

受付で教えられた窓口に行きますと、若い役人は無愛想な声で

「ハンコ」

と言いました。そういわれ、気づくと、何ということでしょう。男は印鑑を忘れてきたのです。

「すみません。忘れました」

汗をふきふき、恐縮した男はペコペコ頭を下げました。

「では、ハンコを持って改めて来て下さい」

「それがその」

と、男は言いました。

「家まで帰ったら、もう一度来るのは五時を過ぎてしまうのですが」

「役所は五時で終ります」

実印がいるとか、印鑑証明がいるとは言わずに、「指紋」と言っただけです。

(そうか、外国人登録には指紋が必要だったのか)という思いは、(成程それなら本人が行かなければいけない)という風につながりながら、それよりも(指紋だなんて、日本政府が思いつきそうなことだわい、いかにもな)という連想の方により強く結びつき、怒りとも、苦笑ともつかない複雑な感情にのめりこむのです。

怒りは、何かと言えば人民を犯罪人扱いする警察国家日本への怒りです。

悲しみは、犯罪人扱いを外国人にまで当てはめようとするこゝへの日本人としての恥ずかしさ、悲しさです。

苦笑は、陰險で、形式主義で、事大主義の官僚への、(どうしようもないな)とでも言いたい感想なのです。

私にはお役人というものが、人間放れた化け物というより、道化人形に思えてならないのです。

そんな道化人形に行政をまかせる人民ほど悲惨なものはないというべきでしょうか。

ヨーロッパやアメリカなどではどうなっているのでしょうか。外国人登録というようなものがあるのでしょうか。あるとして、指紋をとるのででしょうか。

思い出すことがあります。

「あの、明日ではいけませんでしょうか」

役人は男の手からハガキをひたくり、目を走らせてから、冷めたく言いました。

「いけません。ここに何月何日までと書いてあつてしょう。期限がすぎると、あなたの権利はなくなります」

男は途方にくれ、すがりつくような声で頼みました。

「なんとかハンコなしで……というわけにはいきませんでしょうか」

「いけません」

「そこを何とか」

「いけません。たら、いけません。ハンコがなければ、あなたが本人であることを証明出来ないのでしょう」

「いえ、私が本人です。正真正銘の本人なんです。間違いはありません」

「だから、それをどうやって証明するつもりなんです」

男はまたしても吹き上げてくる汗に顔を光らせて叫びました。

「証明だなんて！ 証明なんかなくたって私がホントの本人なんです——」

「かもしれない。しかし、役所ではあなたが本人かどうか判りません」

「誰か友だちがいて、証明してくればいいんですか」

「何をバカなことを言ってるんです。友だちだなんて、とんでもない。その友だちが真実を申し立てているか誰がどうやって証明できるのです。」

「ひどいッ。それじゃ私はどうしたらいいんですか」

「ハンコです。ハンコ」

役人は向こうをむいてしまいました。男はそのとき、パツとひらめきました。

「そうだッ」

「何ですか。大きな声を出さないで下さい。ここではみんな静かに事務をとっています」

「いえ、あるんですよ。私が私だという証明があるんです。車の免許証です」

「ふんふん、車の免許証ねえ。だがしかし、その免許証が盗んだり、ひろったりしたものでないという証拠はないでしょう」

「何を言うんです。ちゃんと写真が貼ってあるじゃないですか」

「偽造かもしれません」

「それだけじゃありません。役所からきたハガキを見せたいやないですか」

「ハガキ？ ああこれですか。こんなもの運転免許証がニセモノなら、これだッ」

「何て頑固な役人だ」

男はほとんど絶望しました。

「何て判らん人だ」

役人はまた向うへ行きかけました。

「待つて下さい。それならどうしたら私が本人だと認めてくれるんですか」

「だから何度も説明したでしょう。要するにハンコがあればいいんです」

「そのハンコを忘れたんです」

「とにかく規則は規則ですから」

「じゃア、指印ではどうですか」

「そんなもの印鑑として認められません」

男の絶望は、このとき怒りに変わりました。

「何をぬかす。クソ役人め。俺の指紋はちゃんと登録してあるんだぜ」

しかし役人はもうふり向いてもくれません。

「コラ、ヤイ、それでもお前は公僕か」

男は精一杯になりましたが、冷めたいお役所の無反応な空気の中では、その怒りもわなしくしぼんでしまい、前より深い暗い絶望の淵に沈んでしまいました。

やがて、あきらめた男が窓口を離れようとしたとき、先刻から様子を見ていた一人の老人が何やら男の耳にさ

ささやきました。

男は驚いたように老人を見返りました。

「まさか、そんな」

老人はニコニコうなづいています。

「まア、欺まされたと思って行きなさん」

男は大きく役所を飛び出し、近くの文房具屋で、出来合いの三文判を買い、再び窓口に行きました。

「ハイ、これでいいんです。何しろ規則通りですから、手続きは完全です」

そう言って、お役人はエビス顔になりました。そうです。老人が耳うちしたのは、三文判を買いことだったのです。

そんなバカなと読者は思ひましょうか。

つい今しがた、位いてもわめいても受けつけてくれたかった役人が、三文判一ヶで（どこでひろってきたか）れないようなハンコで、男が本人であることを認めてくれたのです。

ハンコはそれほど大切だというオハナシではありません。お役人とはそれほど馬鹿げた人間だというオハナシです。

阪急宝塚線の電車の中で、私が思い出したのはそんなことですが、それに続いてもう一つ、鮮やかに思い出した

たことがあります。

それは、私たちが多田に移る少し前、尼崎市道意町の飯場での出来事です。だから一九六七年（昭和四二年）の夏ごろです。電車の中でそれを思い出したときからいえば、半年余り前になります。

「日イ野ヤア」

平山親父が例の飯場も吹っ飛びそりな大声で私を呼んだのです。

「何ですか」

と聞くと、それから急に声をひそめて「警察がこんなもん、持ってきよったんやけどな。替いたってくれるか」

さし出された一枚の紙を見ると、ケイ線が縦横に引かれていて、氏名、住所、本籍地をそれぞれ書きこむようになってます。

瞬間、私の中で青白い火花が はじけ、体中の血がカッときたりしました。

「これをどうして言うんですか」

出来るだけ興奮をおさえたつもりですが、私の声は意志に反して鋭くなったようです。

平山親父は私の態度に面喰って、呆れたように目をまたたきました。